

## 発刊によせて

平成二十九年四月、当研究所は本学の儒学文化研究所を統合し、新生東洋思想研究所として再出発を切った。それにともない、現代儒学部門、現代仏教部門、西洋哲学部門、イスラム思想部門の四部門体制が設置され、現在、各部門で定期的な研究活動が行われている。設立十周年を明年に控え、東洋思想研究所の専任研究員は四名、その他の研究員が十四名、国内客員研究員十六名、海外客員研究員二名、顧問等を加えると総勢四十二名の陣容が整った。研究所の発展にご尽力いただいた関係各位に心より感謝するとともに、これまで以上に社会貢献のための東洋思想を構築すべく、所員一同、力の限り精進する決意である。

本誌『研究 東洋』も、今回で第八号となった。本学伝統の「孔子祭」における海外識者の記念講演、各部門からの研究論文・研究ノート、書評、地元市長へのインタビュー、専門書の翻訳等、内容は多岐にわたっている。儒学や仏教等の東洋思想を学問の領域に閉じ込めることなく、広く社会に開放する。これが当研究所のモットーである。今後とも、東洋思想の究明を基調としながら、一般市民の方々にも愛読される研究誌を目指して努力を重ねたいと思う。

さて、「無力感の病」が言われて久しい。現代人が無力感や絶望感に襲われるのは、社会システムの巨大化や複雑化だけが原因ではない。根本的に、それは近代以降の「個」の目ざめに起因している。個の自覚がない古代人にとって、無力感の悩みはさほど顕著ではなかったと思う。個に目ざめたからこそ、現代人は自分の無力感を嘆く。また、自分が嫌いになったり、反対に自分を過剰に愛したりするのである。

仏教の立場から言えば、個の自覚は自我への執着であるから、いったん否定されねばならない。歴史上の釈尊が無我を説いたのはそのためである。しかしながら、その釈尊は死の間際に「自己を抛りどころとせよ」と教えたという。仏教が否定するのは、偽りの自己への執着である。真実の自己は、むしろ究極の抛りどころと言ってよい。かくして大乘仏教は、この真実の自己を「大我」とも名づけた。

大我は、国家や社会にとどまらず地球全体、結局は宇宙全体を包み込む巨大な自己を指す。それは、個でありながら全体である。「個即全」の自己である。仏教は「一人の小ささ」や「一人の空しさ」を説く教えではない。かえって「一人の巨大さ」を説く。真の仏教は個人主義である。ただし、近代的な「小さな個人主義」でなく、近代が次に向かうべき「大きな個人主義」を志向する。

大きな個人主義に立てば、一人の人間は決して社会システムの歯車などではない。社会システムの全体に見えざる巨大な影響力を及ぼす部分である。「個即全」という仏教の存在論による限り、そう言わざるを得ない。ただ、私たちがその事実を五感で知ることができないだけである。人は本来「大きな個人」である。つながれた一つではなく、つなげる一つである。つながりの起点となる一つである。つながれた個人は無力感に襲われるが、つなげる個人は使命感を持って生きる。

大乘仏典の『法華経』に説かれる「宝塔」なども、そうした「一人の巨大さ」を教えているのである。

平成三十年二月十六日

東日本国際大学  
東洋思想研究所所長

松 岡 幹 夫